中京学院大学経営学会
研究紀要　第15巻第1・2号
2008年3月発行

総括複文に関する一考察

石　田　琢　智

目　次

1．概　　要
2．音声（話し言葉）からの分析
3．語彙からの分析
4．文法からの分析
5．論理面からの分析
6．修辞学からの分析
7．心理面からの分析
8．結語

キーワード：
総括複文・連続語句のない複文・統一した語調・指示関係＜承指関係＞・指示詞＜承指詞＞・多述語性構造＜多述謂性結構＞(統一体）・連言（そして）判断＜聯言判断＞・(主述句を文成分に含む単文である）包孕複文・多述語性構造の論理―語義の繋がり＜語義鏈＞

1．概　　要

本試論は、現代中国語における総括複文を中国語の話し言葉、音声・語彙・文法・論理・修辞・心理学等の各方面から分析、論証し、この種の文型が繰返される成分＜複指成分＞（単文）であるという従来の文法の論説に対して反論を加え、更にはこの種の文型の構造と機能を分析するものである。本試論の分析、実験及び多述語性構造＜多述謂性結構＞の概念は、現代中国語の複文研究のために、従来とは異なった理論を提起するものであると考える。

本試論では以下のような複文について検討を行った。

例1．历史有客观规律，这是千真万确的。
（歴史には客観的法則がある。これは至極確かなことである。）

例2．国家的利益高于一切，人民的利益大于一切，这是我们的行动准则。
（国家の利益は他の全てのものより優先し、人民の利益は全てのものより大きい。

これが我々の行動の原則である。）

例３．这部电影打动了千千万万个观众，这不仅是因为导演和演员的表演艺术精湛，而且是因为电影故事的情节深深地吸引着人们。<注1>
（この映画は幾千幾万の観衆を感動させた。これは監督と俳優の演技力が素晴らしいばかりでなく、映画の筋が人々を魅了したことによるものである）

この種の文は従来の文法では単文と見なされ、その始めのクローズは繰返される＜複指＞成分＜複指成分＞であると分析している（この代表人物は中国語文法学者である張志公氏である）。この文法分析法では、余り長くない文に対しては非常にうまく説明することが可能である。例えば、例１では繰返される成分＜複指成分＞のある判断文であると分析している。しかし、実際に使う言葉は非常に複雑である。例えば、例２の“这”（これ）の前に一対の並列複文が存在し、また、例３の“这”（これ）の後に１つの累進複文が続いている。これらの要素を考慮すると、例２と例３を単文と分析するには無理があるように考えられる。なぜなら単文の中には複雑な論理関係があるべきではないからである。

総括複文は現代中国語の連続語句のない複文であり、その主な特徴は後続のクローズ（節）に指示代名詞“这(那)”〔これは（それは）〕があり、後続のクローズの冒頭の指示代名詞“这(那)”は、始まりのクローズを承け、総括性を持つものである。従って、このような連続語句のない複文は、「総括複文」であると定義すべきであると考える。

それが複文であると言うことの論拠については以下に述べる。

２．音声（話し言葉）からの分析

総括複文の後続のクローズは、前のクローズ（節）を承ける信号＜承指信号＞“这(那)”から始まる。それはその他の複文の連接語句と同じく、論理的なアクセントが存在する。例えば、“不但……而且……”（ばかりでなく、……）、“因為……所以……”（……ので、……）。このような複文を朗読する際に、その前のクローズを承ける信号＜承指信号＞“这(那)”にややアクセントを付け、その音声を大きく、かつ力強く発声する。また、この音節は普通の“这(那)”の音声より長くなる。これは人々が後続のクローズを承けている前のクローズ＜承指小句＞を論理的に内包していることを重視している表われであるからである。これらの補助的で論理的なアクセントは、従来あまり重視されてこなかったが、これは正に複文の論理関係の一種の形式表現と音声手段を表わすものであると考えられる。

この他に、総括複文には常に文の中でポーズ（停頓、書面での表現はコンマ）があることに注意する必要がある。これは繰返される成分＜複指成分＞を、単文であると考える立場に立った場合、更に研究を進めるべき問題であると言える。繰返される成分＜複指成分＞を単文としたものには、一般的にはこのような文中でのポーズが存在しない。例えば、

「首都北京是中国的心脏」（首都北京は中国の心臓である）。

この文の繰返される成分<複指成分>“首都”と“北京”との間にはポーズがほとんど存在しない。一方、前述の例1～例3の三つの文については、始めのクローズと後続のクローズとの間のポーズが、論理的な関係からして必要な文法手段となっている。しかしそのポーズは文末にあるような隔離性を持った休止ではない。ただ、総括複文においても、長い休止が必要で有るものも存在する。例えば：

例4．在工作中决不要拒绝做小事情，因为大事情是由小事情积成的，——这是导师的重要遗训之一。
（仕事している時に小さな事を拒んではいけません。大きな事は小さな事が積み重なったものですから。——これは指導者の重要な遺訓の一つです。）

例5．经济上实行垄断，军事上实施侵略，政治上进行参透，外贸上更加专横：这就是帝国主义一贯的作风。
（経済上で独占をし、軍事上で侵略をし、政治上で浸透を行い、対外貿易上で更なる専横をする。これは帝国主義の一貫したやり方である。）

上記の二つの文の“ダッシュ”や“コロン”はコンマより音声のポーズがもっと長いことを示している。それらはもっと多くの層をもった構造上の階層であることを表しているのである。<注2>

この他に、総括複文の文全体には統一した語調が存在する。それは前後の二つのクローズを連接するだけでなく、関係を表現する音声上の手段でも有るものである。例えば：

例6．公园去不去，那无关紧要。
（公園へ行くかどうか、それはたいしたことではない。）

始めのクローズを単独で文とする場合、文末には文末を示す著しい語調がある。その書面上の表示も疑問符となり、この疑問符は隔離するための休止として次の文と隔離する。しかし、上述の文では「公園へ行くかどうか」は文末で著しく休止する語調がない。それは複文の始めのクローズであり、独立かつ完結を意味しないので、後続のクローズに接続した語調をとっている。この語調は音声が完全に降下する語調ではなく、やや上昇気味であるが、疑問文の際の語調のように高く上昇するわけでもない。この場合はすぐ次に続くクローズの語調の音声と調和した語調の波形を形成しているのである。総括複文の統一語調波の曲線には次のような著しい特徴が存在する。つまり、始めのクローズは予告するような語調であり、話し言葉の速度は速いが、クローズ末の音声の調子は完全に降下しない。またクローズ中でのポーズは長くはない。一方、後を承けたクローズ<承指小句>は接続している語調として読み、速度は遅く、音量は大きくなる。この文の語調の特徴は正に総括複文中の前のクローズを後のクローズで承けているもの<承指関係>を表わしているのである。<注3>

始めのクローズにおいて、開始時には音声の速度が速く、短く、クローズの末尾付近にな

ると音声が長く、その強度が増し、高音となる。これらの語調は、文がまだ終らないことを示し、始めのクローズの思想と表現の意味が未結であることを示している。これは始めのクローズが、後続のクローズと一緒でなければ文が完了しないことを証明できるものであると言えるのである。アクセント、ポーズ、語調等の言語手段は、これらの連接語句のない複文の論理文法の関係を表現する最も重要な手段であると言えるのである。

3．語彙からの分析

一般に言って、複文は常に連接語句において、その論理文法の関係を示しているものである。本試論で検討する連続語句のない複文は、連接語句で文法関係の意味を表現しているわけではないが、それをもって語彙の表現手段がないという訳ではない。総括複文の後続のクローズは常に指示代名詞“这(那)”で始まっている。この“这(那)”は前のクローズを承ける信号＜承指信号＞であり、前のクローズを受けて後のクローズを始める役割を有しているのである。これは、始めのクローズの指示代名詞であると同時に、後続のクローズの動作行為（述語やフレーズ）を陳述しようとしているものなのである。“这(那)”の存在は、始めのクローズが文全体の意味を表現する上で、その独立性を弱めており、後続のクローズがなければ、意味の表現が不完全な状態になっている。同じく、後続のクローズが始めのクローズから乖離すれば、文全体でその頭となる部分が欠落し、前後の役割が成り立たなくなる。従って、前のクローズを承ける信号＜承指信号＞を、前後の二つのクローズの連接手段と見なすのであり、それは総括複文の形式標示となっているのである。“这(那)”そのものには語義上で抽象性や概括性があり、かつ一種の総括的な役割が存在している。その機能は文意を突出させ、強調させることにあるのである。

なお、後続のクローズは一般に判断クローズで、その判断動詞の前には、常に副詞性の修飾語が挿入されている。例えば、就（じきに）、才（ようやく）、便（もう）、实在（確かに）、正（ちょうど）、也（も）、已经（既に）、完全（全く）、显然（著しく）、还不（まだ）、实际上（事実上）、只能（だけ）、就算（たとえ）、岂不（ではないか）、也会（でもある）、などである。

これらの副詞性の修飾語もまた、前後の二つのクローズを連接させ、かつ論理文法の関係を表現する語彙手段であると言える。

4．文法からの分析

指示語である“这(那)”は、始めのクローズと後続のクローズを分離させ、かつ後続のクローズの発端に位置する。このような固定した語順は総括複文の内在関係と論理関係を明確にしている<注4>。また、そればかりでなく、前後の二つのクローズは前後の関連を通して文法範疇を表現している。

例７．如果要我与他分开，这是做梦。

（もし彼と離れさせようとするなんて、これこそができないことです。）

上記の例は「もし」の仮説であり、将来の状態を表現している。これらの文法範疇では前後のクローズが相互に影響し合い、前後の二つのクローズの相互依頼、相互制約が充分に理解できる。文全体の文法、語義、語調は必ず二つ或いは二つ以上の述語性の文法単位<述謂性句法単位>により、定まった構造方式で、連接して共にその役割を果している。このように考察すると、総括複文は一種の多述語性の構造<多述謂性結構>の統一体であると言えるのである。<注5>

総括複文の文法構造上の階層は、単文の場合より大きい。

例8．企图以权谋私，受贿行贿，又不去坦白自首，那只能是一种违法的犯罪行为，出了受到法律惩处外，不会有什么好果子吃。
（職権を利用して私利を計り、贈収賄を行い、警察に自首すらしないが、それは違法な犯罪行為であり、法律の処罰を受ける他に、良い方法はない。）

上記例文の構造上の階層<結構層次>の分析方法は、単文のように先ず主語と述語の関係を分けて単語とフレーズとの関係を分析することではなく、第一層で先ず“这(那)”により、始めのクローズと後続のクローズを分離し、複文はこの二つのクローズで分かれるので、それは文法の上での最高階層<最高層次>段落であり、最大のものであると言える。総括複文を分析する際に、成分関係は既に二次的な存在であり、重要なのは前後のクローズの論理、つまり、語義関係を分析することにあると言える。これは総括複文と単文に対し、構造分析、層次分析を行う上での本質的な相違である。このことから分かるように、総括複文は単語とフレーズからなるものではなく、二つ或いは二つ以上のクローズ（動態単位）からなる構造網であると言える。<注6>

5．論理面からの分析

論理言語学の角度から分析すれば、総括複文は複合した判断<複合判断>であると言える。それを構成する始めのクローズはストレートな判断構造<直言判断>であり、その後続のクローズもストレートな判断構造である（あるクローズは、そのものが複合した判断である場合も有る）。この二つの別々の判断との間に共存関係があり、判断する対象は真実であるので、それは連言（そして）判断<聯言判断>である。

総括複文は、複合判断より更に高い抽象的思惟形式を表現できる。

例9．穿马路不走人行道，这就是说他将要被罚款十元。
（通りを渡る際に横断歩道を渡らない。これは彼に対し十元の罰金を課するということである）。

実際には、これは大きな前提となる三段論法を省略したものである。その論理公式には以下のものがある。

・(凡)穿马路不走人行道(者)，都要被罚款十元。
（全ての）道路を渡る際に横断歩道を歩かない（者）に対し、十元の罰金を課するものである。
・(他)穿马路不走人行道。
（彼は）道路を渡る際に歩道を歩かない。
・(那就是说他)将要被罚款十元。
（このことから彼に対し）十元の罰金を課する。

これは論理公式であり、単純な三段論法を表現し、演繹推理である。しかし、これは論理公式ではあるが、言語表現の形式ではない。実際の言語では、構造が異なっており、論理を飛び越えて、もっと簡潔になっている。論理公式では文が重複しているので、実際の言葉ではこの三つの文を一つの文にまとめ、簡単な三段論法の大きな前提を省略し、言葉が簡単で、要領を得た表現効果を出しており、論理の推理が生き生きとして、人の心を動かすものとなっている。これは単純な三段論法を、総括複文に変える典型的な例文である。この例文の上述のような作文の過程から、本試論で検討する文型は、単文の構造形式ではなく、総括複文であると証明できる。なぜならば、一般の単文の形式では複雑な演繹推理の三段論法は表現できないからである。

6．修辞学からの分析

総括複文という文型は狭い叙述と狭い議論<夹余夹议>の修辞機能がある。一般に前段で叙述し、後段でこれを議論、解説する。例えば：

例10. 美国兵进村防火烧房，强奸花姑娘，抢夺农民的牛羊，这就是他们所谓的亲善。
（アメリカ兵は村に入って家屋を焼き、若い娘を強姦し、農民の牛や羊を奪うが、これは彼らのいわゆる“親善”である）。

例10の始まりのクローズでアメリカ兵のいろいろな犯罪行為を述べ、後続のクローズで、アメリカ兵の“親善”の仮面をずばりと指摘している。文全体の言葉は簡潔で、話しぶりが生き生きとして力強く感じさせている。叙述と議論をうまく組合せて、修辞の効果をよく発揮させている。これはまた、修辞構造上の階層<結構層次>の逓増をも表現しているのである。

言語の欧米化の影響で、現代中国語でクローズを主語とする単文—すなわち包孕複文<包孕句>の形式が現われてきた。これは言語が進化した結果であるともいえるが、クローズが長くなれば、それに伴って包括文も長くなり、構造が複雑となってしまう。

例11. 一个人如果没有明确的生活目标，没有正确的生活方式，要想提高生活质量，并达到较好的生活层次，是不大可能的。

（人がもし明確な生活目標がなく、正確な生活様式がないままに、生活水準を向上させ、かつより良い生活レベルに達するようにすることは、ほとんど不可能なことです）。

例11はクローズを主語とする包孕複文である。読む人に対して、この文は前の構造が複雑、分量も長く、それに比べ末尾は軽い感じを与えてしまっている。これを改善するため、文が簡単明瞭で、コンパクトでリズムに溢れ、文の音律のバランスがとるように、読者や作者は常に判断詞“是”の前に指示語“这(那)”を付け加え、複雑な長文を二つのクローズに変更し、1つに凝り固まったものを、分解して読みやすくする修辞効果を出すようにしており、また、このような文型の変更は、既に修辞学と創作学の共同研究課題となっている。文の前後のバランスがとれない場合、必ず指示語“这(那)”を付け加えるべきであり、これにより文のリズムが良くなり、音律が流暢となるばかりでなく、前後のつながりが明確になる。指示語は修辞機能において無視することができないのである。<注7>

7．心理面からの分析

本試論で述べた文型が複文であることを証明するために、上海同済大学の林立研究員に依頼して以下の心理実験を行った。まず被試験者（中国人）に二つの例文の録音を聞かせ、それぞれを理解（認識）する時間を測定した。

例a．小李时常迟到，是他没有评上奖的原因。
（李さんがいつも遅刻することが、賞与をもらえない原因です）。

例b．小李时常迟到，这是他没有评上奖的原因。
（李さんはいつも遅刻しています。これが賞与をもらえない原因です）。

結果として、被試験者が録音を理解（認識）する時間は、例aと例bでは、ほとんど2対3の割合であることが判明した。これは被試験者が、例aを二つのフレーズとして感知したので、例aを一つの文型（情報）として大脳に刻み込ませ記憶したのに対し、例bを聞く際には被試験者は、常に指示語“这(那)”を二つの文型の分岐点としたため、例bを二つの文型として大脳に刻み込ませ記憶したことが原因と考えられる。前半の文を拡大或いは短縮しても、実験の結果は同様であった。被試験者は常に例bを“二つの意味”として体験し、記憶したためと考えられるのである。この心理実験は本試論の論点に対し傍証資料と成った。

8．結　　語

以上のように、話し言葉の音声、語彙、文法、論理、修辞、心理等六つの面から現代中国語に於ける総括複文の分析、論証を試みた。これによりこの種の文型が繰返される成分<複

指成分＞（単文）であるという従来型手法による文法の論説に対し、新たな視点、つまり「多述語性構造＜多述謂性結構＞の統一体理論の確立」という理論が提起できたと思う。

〈注釈〉

＜注１＞　現代中国語には総括複文と類似する文型が存在する。例えば：

・母亲年轻时非常漂亮，而这并非她骄傲的唯一资本。

（母親は若い時非常に美しかったのですが、これは彼女が自慢する唯一のものではありません）。

・大家都知道，那是不对的。

（みんなが承知しているように、それは誤りなのです）。

・这是永恒的真理：爱情不可强求。

（これは永遠の真理である、愛情は強要できません）。

・我们倡议和谐社会，这种社会风尚时代的要求。

（我々は調和のとれた社会を提唱する。このような社会気風は時代の要求である）。

上記の文は本試論で述べた複文の文型ではないので、別に論ずるとして、ここで言及しておりません。

＜注２＞　この実験は、元上海同済大学の林立助教授の協力のもと、上海のアナウンサーを起用して試験を行った。前後するフレーズ間の言葉のポーズは30ミリ秒を超えなかったが、前後するクローズ間の言葉のポーズは120ミリ秒を超えていたので、両者が反映する構造上の階層は異なっているといえる。

＜注３＞　本試験も同上の環境で行われた。分析の結果から分かるように、「公園へ行くかどうか」は独立した成文（単文）とした場合、その音声の長さは1380ミリ秒だが、始まりのクローズとした場合は1290ミリ秒で、言葉の速度が速くなる。最後の言葉“去（行く）”の音の強さは単文：複文＝12dB：17dBで、音のレベルは150ヘルツ：250ヘルツであった。

＜注４＞　始めのクローズと後続のクローズの語順の転倒の例は非常に少ない。それは漢民族の思惟方式に適していないからでは、と考察する。実際に翻訳作品にはこれを見ることがあり、現代風の（欧米化の影響を受けた）文体にも見受けられる。

＜注５＞　述語性という文法用語はソ連の言語学者の論著に普通存在し、中国もこの影響を受けていると考える。

＜注６＞　外国語でこのような文型がよく見受けられる。例えば：

It is a question when we shall have our sports week.

――――（英語）仮主語構文＜主語従句＞。

＜注７＞　包括複文と総括複文の構文変換は別に専門課題として検討する必要があると考える。

参考文献

・『新しい中国語語法』1996年12月　東方書店　中山時子監修
・『中国語の語法の話――中国語文法概論』1993年７月　光生館　輿水優著
・『中国語文法入門』 1995年２月　大学書林　土屋申一著
・『现代汉语』1987年６月　上海教育出版社　胡裕树主编
・『现代汉语学习指导书』1993年　中央广播电视大学出版社　张斌，胡吉成 编著